

## 書評

稲原美苗・川崎唯史・中澤瞳・宮原優（編著）

『フェミニスト現象学入門—経験から「普通」を問い直す—』  
ナカニシヤ出版、2020年5月、195頁

小川未空\*

### 1. 本書の概要

本書は、フェミニスト現象学の入門書として位置付けられている。フェミニスト現象学は、フランスの哲学者シモーヌ・ド・ボーヴォワールの著作である『第二の性』（1949年）の第2巻「生きられた経験」に始まる。本書では、「生きられた経験」を「意識的ではない知覚を通じて世界と関わっている経験」（8頁）と表現する。それは、「まだ知的な反省作業の始まっていない経験であり、意識的により分けられずに、色々なものがごった煮になっている経験」である（8頁）。本書が重視するのは、そのような、生きられた経験の記述である。フェミニスト現象学では、この「生きられた経験」を当事者の視点から記述することで、現実世界の在り様に接近することが可能であると考えられている。本書における記述は、経験に関わる当事者が、自分自身の経験について振り返る記述もあれば、当事者の経験がかかれた書籍を紐解いていく記述もあり、その描き方は章によって異なる。章ごとに違いはあるものの、全章を通して貫徹されているのは分かりやすさといえるかもしれない。本書では、「学術的な整合性や新しい知識を提示するスタイルではなく、誰もが自分自身の経験に思いをはせることのできるようなリアリティ」が大切にされている（187頁）。

14章で構成される本書は、第I部「フェミニスト現象学の始まり」（第1～7章）と、第II部「フェミニスト現象学の拡がり」（第8～14章）に大別される。それぞれの部の冒頭の章（第1章と第8章）では、フェミニスト現象学に関わる主要な文献がレビューされ、昨今の学問的な動向がまとめられている。これらは、その後の記述の章（第2～7章、第9～14章）を案内する入口の役割を果たしている。

まず第1章（中澤瞳）では、フェミニスト現象学に関する基本的な視点や

---

\* 大阪大学大学院人間科学研究科・助教・ogawamiku@hus.osaka-u.ac.jp

特徴、意義についてまとめられている。「フェミニスト現象学」とは、「フェミニズム」と「現象学」を併せ持つ概念である。「フェミニズム」は、女性の権利の希求を発端とするが、その発展のなかで必ずしも女性のためだけの思想・実践ではなくなってきた。たとえば、男女というカテゴリーの自明性を問い直し、多様な性の在り方について考えられるようになってきている。また、性差別はもちろんのこと、その他の様々な差別を生み出す規範や制度を批判してきた領域横断的な思想でもある。一方の「現象学」は、一人称の記述を重視することで、「日常的に、特に深く考えずになんとなく経験しているせいで、意識されず、忘れ去られてしまった原初的な経験を呼び戻す(3頁) そうとするものである。それは個々の当事者にとっては素朴な経験かもしれないが、記述を通して表出され、そして、共感を喚起するものとなりうる。この2つのエッセンスをもつ「フェミニスト現象学」は、「生きられた経験を当事者の視点から記述する」ことで、さまざまな立場の人の経験について、当事者の視点から探求する学として展開している。

第2章からは、経験の記述が中心となり、身振りにある女の子「らしさ」(第2章/中澤瞳)、妊娠に伴う習慣の変化(第3章/宮原優)、月経を取り巻く困難(第4章/宮原優)、外見がもたらす影響(第5章/佐藤愛)、セクシュアル・ハラスメントに関わる経験の意味(第6章/山本千晶)、家に住むことと自立との関連(第7章/池田喬)について記述、分析される。

続く第II部の第8章(稲原美苗)では、フェミニスト現象学が、女性を主たる対象としてきた萌芽期から、現在では、様々なマイノリティの経験や、複数の差別や抑圧の構造が交差する経験を記述する活動へと変化していることが概論的に描かれる。なお、「マジョリティ/マイノリティ」とは、必ずしも人数の多寡を示す言葉ではない。「マイノリティ」とは、単純な量的問題ではなく、「一致すべきモデル」がないという状況にいる個人もしくは集団を指す概念である。「一致すべきモデル」とは、「規範」のことである。日本社会では、たとえば、「日本人男性/異性愛者/標準世帯(父親・母親・子どもの核家族)/健常者/大卒/大企業の正社員」などが挙げられている。そのような条件を兼ね備えた男性は量的には少数である。しかし、そのような少数者だけが力を得られる日本社会のシステムが、多くのマイノリティを生み出している。「マイノリティ」とは、それを意味する言葉である。

第9章からは、昨今のフェミニズムが焦点を当てる対象の拡がりが増強調

される。具体的な経験の記述は、日本における外国人のゲイ・アイデンティティ（第9章／フィリップ・ヒューズ）、トランスジェンダーの身体経験（第10章／藤高和輝）、男らしさに関わる経験（第11章／川崎唯史・小手川正二郎）、人種と「ハーフ」からみる外見による差別（第12章／池田喬・小手川正二郎）、障害者の生きられた経験（第13章／稲原美苗）、老いるという経験（第14章／中澤瞳）が挙げられる。第II部では、その題材からも分かるように、いわゆる「女性」に限定されない、多様なマイノリティの経験に焦点が当てられている。たとえば第11章では、あえてマジョリティにある男性の経験の記述が扱われている。ここでは、「男らしさ」の規範や期待が男性を抑圧するという問題と、また、男性たちが男らしさを追い求めることで女性との不平等な関係が構築されているという問題にも切り込んでいる。

## 2. 経験の記述

さて、本書で扱われている「経験の記述」とは、具体的にはどのようなものだろうか。ここでは事例として、第3章「妊娠とは、お腹が大きくなることなのだろうか？—妊娠のフェミニスト現象学—」について紹介したい。本章では、著者（宮原）が実際に当事者として得た妊娠に関わる経験が記述されている。宮原は、妊娠によって「体が変わる」ことは、物理的なお腹の拡大や体重の増加、ホルモンによる吐き気や腰の痛みといった変化だけでなく、それまでに身につけてきた「振る舞い方」「物事のこなし方」「世界の捉え方」が変わることであると記述している。それは妊娠に限らず、メルロ＝ポンティが指摘しているように、環境や身体の変化に伴って、行動の前提となる習慣が繰り返し更新され、創り直されるためである。宮原は、妊娠という経験を例にとり、それまでの日々が崩れていくことと、胎児との「共存」の経験を通して、メルロ＝ポンティが指摘する「習慣的身体」という概念を振り返っている。この記述により、前者では、日常生活がどのように成り立ち、どのようにそこから締め出されるのか、また、後者では、手応えを十分に感じられない胎児との関わりを基に、「それが何なのかわからないもの」と関わっていくとはどういうことかを考えてほしいと喚起している。もちろん妊娠に伴う身体の変化や、その変化が女性にどのような影響をもたら

すかには、大きな個人差がある。それを踏まえて宮原は、どのように身体が変化するか、ではなく、「予測できない形で身体が絶えず大きく変化していくとはどのようなことであるのか」に焦点を絞って記述を進めていく(25頁)。これにより、妊娠に限らず、引越や転職、視力の低下や怪我など、環境や身体の変化に伴い更新され続ける習慣を示すことによって、既存の「当たり前」がいとも簡単に機能しなくなる経験が記述される。

評者が、専門とは異なる「フェミニズム」に関心を持ち、そして本書を手を取ったのは、評者自身が年齢をかさねるにつれて、女性であることの生きづらさや不便さを実感するようになったためだろう。身体に様々な変化が出るだけでなく、友人や親族といった身近な人の生活が変わっていく。そのなかで、自分自身の生活が変化していくことで、あるいは、変化しないことによっても、外側から張り付けられた「女性である」というレッテルを、生活の随所で痛感することがある。それは、自分が周囲から男性とは同じに扱われないことの経験であり、もっといえば、初めて自覚する「マイノリティ」としての経験だともいえるだろう。それは、宮原が描いたような、既存の「当たり前」が、生活の変化に伴って絶えず更新されていくことでもある。

2020年10月9日、『82年生まれ、キム・ジョン』という韓国映画が日本でも公開された。本作品は、2016年に韓国で出版され、100万部以上を売り上げた小説が原作となっている(チョ・ナムジュ著)。映画は、社会学者の上野千鶴子が「原作よりもっとリアル。原作よりもっとおもしろい。原作とはべつものの感動。女も男も“いいひと”ばかりなのに、女ばかりを追い詰める性差別の構造が「あるある」感満載のドラマに、くっきりと浮かびあがる」(公式HP)とコメントを寄せているように、小説よりもさらに身近に感じられる、生きられた経験の記述になっている。また、上野が「女も男も“いいひと”ばかりなのに」と述べているように、映画では小説よりも、さらに多様な視点から経験が記述される。とりわけ主人公の夫の視点からは、夫の抱える葛藤もリアルに読み取ることができる。それは、主人公を苦しめる「当たり前」が、なぜ社会に構成されているのかを問いかけてくる。

本書や、このような作品における「経験の記述」には、どのような意味があるだろうか。映画予告編(公式HP)には、「大丈夫、あなたは一人じゃない」というキャッチフレーズが浮かび上がる。そして、「妻であり、母であり、娘である、すべての人に」というナレーションが印象的である。しかし

映画は、韓国社会における女性の不自由な経験を、「あるある感満載に」記述しているだけであり、有効な解決策が示されるわけではない。しかしそれでも、作品に共感し、そこに「自分の物語」を発見し、そして励まされ、また、現実社会の不自由をより良い方向へ変容させようとする力が生みだされうる。そこに、生きられた経験の記述の持っている力が明らかとなる。

また、マイノリティ当事者以外の人が経験の記述を紐解いていくことは、それまでの人生経験を通じて内面化された規範を問い直し、無意識に差別の存続に加担していることへ気が付くことにもなるだろう。もちろん「生きられた経験」とは、誰かの主観に基づくものであり「マイノリティ」の総意を表すものにはなりえない。本書でも、フェミニスト現象学は、「万人に通じる否定する余地のない『絶対的真理』を探究しようとしているわけではない」と指摘している（90頁）。なぜなら、「『私』とは、偏ることなく、公正・中立な立場をとる主体などではなく、すでに常に世界（社会やコミュニティ）の中で他者に巻き込まれて交流する、存在者としての『私』だからである」（90頁）。このため、フェミニスト現象学が求めている真理とは、「この『私』によって『生きられた経験』で得た真理」である（90頁）。

『現象学』は難しいことをわかってもらう学問ではなく、『当たり前』の状態や『日常』に潜んでいる謎を解くための哲学である（92頁）。フッサーールによれば、習慣や先入観が伴う「当たり前」というものの見方を、いったん意図的に外し、直接的な経験に立ち戻って、そこから物事を捉え直す作業（これを「現象学的還元」とよぶ）は、現象学の主要な操作のひとつである。この操作をすること、すなわち、経験についてフェミニスト現象学的に記述することは、「この世の中の普遍的かつ本質的である（当たり前である）として捉えられているものを、『マジョリティ』という限られた集団だけに通用するものにすぎないと訴え、『マジョリティ』の自明性を疑問視する力を私たちに与えてくれる」（94頁）。

最近では、東京都足立区の区議会議員の発言が話題をよんだ。区議は、9月の本会議で、LGBTなどの性的マイノリティについて、「日本人が全部L、全部Gで、次の世代は生まれますか。次の世代を担う子どもたちが1人も生まれません。本当にこんなことでいいのだろうか」などと発言したことで批判を浴びた。当該議員は、批判を浴びた後も、謝罪の意向や発言の撤回について強く否定していた。区議の釈明では、「私は人間の生き方ですから、本

人の生き方に対して干渉しようとは思いません」と前置きされており、彼の「当たり前」のなかでは、発言は謝罪すべきものでも撤回すべきものでもないようであった。しかし10月になって、区議は発言を謝罪し、発言の一部撤回を表明した。区議による発言の撤回は、取沙汰された「足立区が減ぶ」という点のみならず、少子化対策と紐づけて「普通の結婚」を押し付けてしまった点も含まれた。たとえば、「【普通の】結婚をして、【普通に】子どもを産んで【普通に】子どもを育てることがいかに人間にとって大切なことであるか」という発言における【普通】に関わる言葉が撤回された。区議は、彼自身の「普通」や「当たり前」が、その価値観の押し付けであったとして撤回に至ったのである。

このような政治の場面において、マジョリティの持つ「当たり前」の価値観は強い影響力を有している。第一波フェミニズムでは、いわゆる公的領域（政治や社会への参加）における男女平等が主な焦点であった。これに対し、第二波フェミニズムでは、公的領域における男女平等を阻害する主要因としての私的領域、すなわち家族を含む親密圏の問題が争点となった（江原2013）。第二波フェミニズムでは、近代社会の公私分離という二元モデルに伴う問題を克服するために、その出発点で「個人的なことは政治的」という主張を行ない、公私分離規範による社会問題化の抑制を打ち破ろうとしたのである（江原2013）。すなわち、私的領域の理解なくして、公的領域にある様々な問題は解決できないのである。

経験の記述は、そこに書かれた記述に共感する人を励ますだけのものではない。マジョリティにおける「当たり前」が絶えず変化していくことは、共生社会の実現においても不可欠である。その変化を促すとき、生きられた経験の記述は大きな可能性を持っているだろう。

### 3. 「経験の記述」が持つ力

本書では、様々なマイノリティの経験が、分かりやすく言語化される。類似の経験を有する人は、自身の経験を「言語化してもらえた」と思いうる。また、記述された経験の当事者でない人にとっても、これまでに生きてきた環境で培われてきた「普通はこうだ」という呪縛、「当たり前」だという先

入観を、いま一度問い直す契機となりうる。

本書の記述は、社会学によくみられる現地調査の段取りが踏まれていない。いつからいつまでの期間、どういった人に、何人程度、どのような事項を聞き取ったのか、そういったことは記されていない。経験した当事者の視点から振り返りながら書かれているものもあれば、ネット上の言説や書籍からの引用を通した論考もあり、ただし、いずれも説得的に記述される。それは、「マイノリティの声を研究者が代弁する」というスタイルとも違う。

第一波フェミニズムには、その運動の主要な担い手が相対的に豊かな中流階層の人に偏っていたという課題があったように、研究者の多くはマジョリティに属し、その記述に限界があることはよく知られている。開発研究を専門とする評者自身にも、この問題は常に突き付けられている。「途上国」とよばれる「貧しい」国に住む当事者ではない者が、一定期間のみ調査地に赴き、当事者の人の声を聴いて分かったようなつもりになる。岡(2000:90)は、「他者を表象すること、それはある特権的な権力の行使でもある」と指摘する。続けて、『第三世界』の女性の権利について私たちが語ろうとするとき、何事を語るにせよ、私たちは彼女たちに対して、すでにある特権的ポジションを占めている。そして、自らの権利の主体であるはずの『第三世界』の女性にとってかわって、彼女たちの権利をめぐる言説の主体となるとき、まさにそうすることで、私たちは、彼女たち自身を、自ら権利の問題の、主体の位置から排除することになる」と、マジョリティがマイノリティを語ることの危うさを批判的に述べている(岡 2000: 90-91)。

2003年に出版された小説にも、ある特徴的な一節がある(チェイス＝リボウ著、2012年邦訳)。その小説では、19世紀初頭に、南アフリカから、イギリス・フランスへ連れていかれ、見世物にされたサラ・パールトマンというコイコイ人女性の生涯が物語として描かれている。サラは、ロンドンのある日、慈善団体によって「奴隷」状態から救出されようとしていた。しかしサラは、慈善団体の牧師と対面した際、次のような言葉を心のなかで発する。「あなたの考えはあなたにとって大切なだけ。私にとってではない。たとえば、あなたは私の言葉をしゃべりさえしない。それなのに、私の歴史を語り、私の理想を語り、私の代理人を騙り、私を救うことをあなたに許すのが私の務めだと語るあなたは、いったい何者なの」(チェイス＝リボウ 2012:195-196)。サラは、正義感に駆られた牧師が差し出す手を跳ね除け、奴

隷であることを否定し、アフリカへ帰る道を自ら断ったのである。これはあくまでも小説内の記述であるが、マイノリティの声を他者が代弁することの脆さを呈している。

本書では、しかし、あくまでも「代弁」という形はとられていない。それぞれの章では、それぞれの距離感で経験が記述されている。とりわけ、著者自身の経験が記述されている章には読み応えがある。たとえば、第9章「なぜ自分のセクシュアリティを口に出すのか?—経験からのセクシュアリティ再考—」では、ゲイかつ外国人である著者（ヒューズ）が、ゲイであることを日本でカミングアウトした際に、「外人だから大丈夫」と言われた経験が記述されている。これをヒューズは、「たとえカミングアウトしてもゲイであることは日本社会の中で不可視化される」（101頁）と表現している。それは単に、潜在化している問題を記述により顕在化させるのではなく、顕在化させたはずなのに不可視化された経験の記述である。このような、「不可視化される」ことの困難は、当事者研究や本書のような経験の記述でこそ明らかにできうることだろう。

本書は、必ずしもフェミニストや現象学に関心のある読者だけを惹きつけるものではない。マイノリティ、マジョリティのいずれの立場であっても、読みながら共感し、納得する箇所が多い読み応えのある本である。また、その方法論においても、多くを学ぶことができるのではないだろうか。共生学に関わる多様な人びとが、面白く読み進めることのできる本である。是非一読を勧めたい。

## 参考文献

- 江原 由美子 2013 「フェミニズムと家族」『社会学評論』64(4):553-571。
- 岡 真理 2000『彼女の「正しい」名前とは何か—第三世界のフェミニズムの思想—』東京：青土社。
- チェイス＝リボウ、バーバラ 2012 『ホッテントット・ヴィーナス—ある物語—』井野瀬久美恵監訳、安保永子・余田愛子訳、東京：法政大学出版局（Chase-Riboud, Barbara. 2003. *Hottentot Venus: A Novel*. New York City: Doubleday）。
- 映画『82年生まれ、キム・ジヨン』オフィシャルサイト「Comments」<http://klockworx-asia.com/kimjiyoung1982/comment/>（2021/1/15アクセス）
- 映画『82年生まれ、キム・ジヨン』オフィシャルサイト <https://klockworx-asia.com/kimjiyoung1982/>（2021/1/15アクセス）